

広島地方裁判所所蔵『却下文書』（明治十年）について（一）

広島修道大学「明治期の法と裁判」研究会

代表 矢野達雄

加藤高

紺谷浩司

目次

- 一 解題——『却下文書』について——
- 二 本文読下し（二一）～（四〇）
- 三 注の部
- 四 目次（二一）～（四〇）
- 五 写真（四葉）

一 解題——『却下文書』について——

一 筆者らは先に『裁判申渡案——自明治五年至同九年』という、明治初年代、廃藩置県直後の広島県庁聴訟課（民事事裁判事務課の担当職員）が、当時の県庁長官指揮下で審理・立案したと推定される民事裁判言渡案を四分冊に手分けして公刊した。その後も明治初年代、当時の浜田県（現在の島根県浜田市に浜田県庁が置かれ、島根県の西半分——石見国——を行政管轄区域としていた）における明治四（一八七二）年から同九（一八七六）年までのいわゆる『訴訟審判録』（民事裁判言渡書に相当するもの）を、引きつ

づき二分冊に分けて、最近、〈資料〉として、世に問うた。^(注2)これらはいずれも明治初年の裁判事情を明らかにすることができ、貴重な資料である。明治政府が江戸徳川期の幕藩体制を打ち破り、新たに中央集権的な統治体制を築くために廃藩置県を断行して以後、新たに設置された新県に、これまで新たに中央政府により地方長官として任命された県令（現在の県知事に相当）が置かれ、「県治条例」という新地方自治制の法制の下、そして当時は未だ三権分立の思想が浸透するに至らず、明治維新イコール王政復古の觀念が支配的であつたこともあり、行政権と司法権とが未分化——というよりも、司法は行政の道具と見る風潮が支配層に濃厚であつたことなども影響して、同条例中の県治職制にも、庶務課、租税課、出納課と並んで聴訟課が置かれていたことがあつた（その後、「県治条例」は明治八（一八七五）年廃止された）。そして又この時期、中国地方諸県には未だ近代的な裁判所が開庁されることがなく、僅かに山口県に初めて裁判所が設置開庁されたのが明治九（一八七六）年四月になってからである。このような法状況が明治十（一八七七）年半ば頃まで、特に広島県では続いていた。

二では、このような過渡期にあつては、とくに司法裁判事情は、広島県ではどのようなものであつたのだろうか。その推定をゆるす指標の一つが、以下に紹介する〈資料〉『却下文書』で、

表紙に「明治十年 民第二五号ノ一 広島地方裁判所民事部」と記載されており、同じような〈資料〉『却下文書』表紙に「自明治十二年 至同十三年 民第二五号ノ二止 広島地方裁判所民事部」と記載されている二冊の裁判史料に見いだされるように思われた。なぜならば、明治期早々の頃の裁判ことに民事裁判事情は、多くの先学が指摘しておられるように、^(注3)訴訟手続に江戸時代の法令や慣習などが運用されていたこと、さらに明治期の前半、民事裁判一般を規律する成文法としては、明治六（一八七三）年の「^(注4)訴訟文例」が見られたに過ぎず、民事訴訟法が制定されるには明治二十三（一八九〇）年まで待たなければならなかつた。

したがって、明治期前半の民事裁判において、審理の取扱いを具体的に窺うことのできる好史料ではないかと、明治期の裁判史料調査に永年にわたり専念してきた筆者らの眼に映じたのである。

三 無論それ以外に当時の裁判を偲ぶ資料は他にも多く見られたが、あえて筆者らが本資料の紹介に踏み切つたのは、かつての裁判実務に永年たずさわつてこられた方々の貴重な回顧談を想起したからであつた。^(注5)

その回顧談中のエピソードとして、民事訴訟の目安札と称する訴状の審理の結果、当時の判事補は訴状の多くを却下し、却下の多さを判事補の技倆とするかのような風潮があつたと語られていた。現在の裁判では到底想像のつかない、当時の法令も何もかも

不備な頃の裁判実務を先人たちは経てきたことをわれわれは知らなければならぬ。いづれにせよ、明治初期の裁判史料『却下文書』を通して、当時の訴訟の審理状況に具体的に接することになる。参考までにその当時の「目安糺」に関する二つの法令を取り上げておくことにする。

一つは、明治八（一八七五）年十二月十二日公布の司法省甲第十六号布達である。

「民事訴状目安ノ際、不受理又ハ願下ゲノ取扱方、左ノ通（リ）相定（メ）候条此旨布達候事

第一条 裁判官訴状ノ目安糺ヲ為シ、受理ス可ラズト思料スル時ハ必ズ其受理ス可ラザルノ理由ヲ記シタル判文ヲ作り訴状ト共ニ下渡シ申スベク、尤モ判文短簡ナル者ハ其判文ヲ訴状ノ表紙又ハ訴状ノ末ノ余白ニ朱書シ裁判所ノ印ヲ押シ下戻シ候テモ苦シカラズ候事
原告人ヨリ差出シタル訴状ノ取下ゲヲ願（ヒ）出ル時ハ取り下ゲヲ為ス事ノ理由ヲ審問シ原告人ニ於テ出訴スルノ権利ヲ抛棄スル事ヲ申出ルニ於テハ原告人ヲシテ何々ノ理由ニ因リ出訴スルノ権利ヲ抛棄スルニ付キ控訴又ハ上告ヲ為サザルノ旨ヲ記載シタル願書二本ヲ受取り、其一本ハ裁判所ニ留置キ、其一本ニ願意ヲ聞届ケタル旨ヲ朱書シ裁判所ノ印ヲ押シ

第二條

広島地方裁判所所蔵『却下文書』（明治十年）について（一）

下戻スベキ事。

但 裁判官ヨリ理解ヲ為シ訴状取下ゲ願ヲ出サシムルヲ得ス」（『法令全書 明治八年ノ2（第八卷の2）』一七四七頁以下。なお、読者が読みやすいように、法文中の句読点などを付し、常用漢字に改めるなどした。以下同じ）

いま一つの法令は、明治十（一八七七）年四月五日公布の司法省丁第二十九号達である。これは江戸時代以降の法制であった目安糺の廃止を告げている。即ち当時の上等裁判所・地方裁判所を名宛人としたもので、

「従来目安糺シト云（フ）成例アリテ出訴ノ起頭、被告ノ答弁ヲ待タズ直（チ）ニ受理不受理ヲ判決スル等ノコト有之候処右ハ廃止可致候条、此旨相達（シ）候事。但大審院ニ於テ願訴ノ下調ヲ為スハ此限ニアラス」（『法令全書 明治十年（第十卷）』九〇六頁以下。『法令全書』は復刻版・原書房に依る）。

筆者は、民事訴訟法史に関しては全くの門外漢であるため、訴訟手続き等については十分な知識を有していない。ただ明治初年代の民事訴訟事件の調査をおとした披見の限りで、明治七年および同八年の『訴状受取録』その他の記録・簿冊を散見したなかでの印象では、却下事件がかなり見られた。今後の調査で、さらに

明治十年前後の却下事例の実情に接してみたいと思っている。

(注1) 広島修道大学「明治期の法と裁判」研究会「明治初年代、広島県庁の民事裁判について(一～四)」『修道法学』第三四卷一号(三五卷二号)。

(注2) 広島修道大学「明治期の法と裁判」研究会「明治初年代、浜田県庁の民事裁判について(一～二)」『修道法学』第三六卷一号(三六卷二号)。

(注3) たとえば、石井良助『近世民事訴訟法史』、同『続近世民事訴訟法史』(いずれも創文社)、鈴木正裕『民事訴訟法史・日本』(有斐閣)。

(注4) 明治六(一八七三)年七月十七日公布太政官布告第二百四十七号『法令全書 第六卷ノ一』三三〇頁。

(注5) 日本法理研究会『明治初期の裁判を語る』(日本法理叢書・別冊四)昭和十七年三五頁以下(三八頁) 参照。

(加藤 高)

二 本文読下し(二)〔四〇〕

(一A) 【一】訴訟入費請求

印**

* 本文は朱書き

〔本訴〕*** 井手取除キ一件ノ該訴訟入費ハ被告KS只吉ニ於テ裁許不服ノ旨ニテ

控訴中二付〔該訴一件〕*** 当今受理セス却下候事

印**

*** 点により削除

主 「一色」***

フク 「小島」***

*** 丸朱印

明治九年十二月廿二日

訴訟入費請求之訴状

広島縣安藝國廣島袋町

九百五十三番邸 寄留

農 富田 治左衛門***

第三千七百貳十号

(一B)

(記述なし)

*** 目次では原告氏名は「KK 七郎次外一名」

(二A) 【二】貸金催促

印*

本訴ハ出訴ノ当日被告ヨリ延期依頼ヲ承諾セシ期限内ノ旨
申立ルニ付訴状却下候事

*「横地安信」の丸朱印

印*

主 「一色」 **
フク 「小島」 **
丸朱印と付箋に朱書き
「フク」は平仮名書き

明治九年十二月二十八日

貸金催促ノ訴状

大坂府

摂津国堂島中二丁目

□□番邸 K T 助太郎 同居

商 I T 伊三郎

第三千八百号

(注3)

(二B)

(記述なし)

(三A) (三) 【貸金催促】

印*

本訴ノ証ハ他人ヨリ譲受ノ証書ナルニ付明治九年

*「横地安信」の丸朱印

広島地方裁判所所蔵『却下文書』(明治十年)について (一)

〔太政官〕 **第九十九号御布告 (注4)

ニ抛リ受理セズ却下候事

印*

主 「一色」 ***
フク 「川北」 ***

丸朱印
丸朱印

明治十年一月四日

貸金催促之訴状

広島縣安藝国廣島袋町

九百五十三番邸 寄留

農 富田 治左衛門

第貳号 ***

(二B)

(記述なし)

朱書き

(四A) (四) 【貸金催促】

印*

本訴証書面借主サヨ儀ハMO家戸主中ノ負債ナルと
現今該家戸主傳次郎ニ対シ返金請求スルトモ明治六年
十二月六日付ニテ相続人ハ傳次郎ナル旨届出タル上ハ全人

*「横地安信」の丸朱印

一一二 (二二)

△資料▽

戸主タルコト判然タリ然ラハサヨ既ニ戸主ノ權利無ク
シテ自己ノ負債ニ歸スヘキ者ニ付全人ヲ被告トスルニ
非レハ受理セス訴狀却下候事^(注5)

印*

一月十日 却下

主 「松野」 **

フク 「一色」 **

** 「丸朱印」

** 「丸朱印」

明治十年一月六日

貸金催促之訴狀

廣島縣安藝國

廣島貳町目五百三拾七番邸

Y M 克太郎 同居

商 Y N 正雄

第五十四号**

*** 朱書き

〔四B〕

(記述なし)

修道法学 三七卷 一号

一一一(一一一)

明治十年一月九日

七等判事 印**

訴狀は紛失か

** 「横地安信」の丸朱印

主 十二等出仕 川北 祐利 印

副 四級判事補 一色 小十郎 印

訴狀却下案伺

該訴遂審問処旧廣島藩代官所へ調達セシ金
員ノ旨申立提供スル第壹号証書ニ於テモ旧
藩債タル瞭然タリ然リ而シテ第二第三兩号
ノ証書ニ到リ賀茂郡阿賀村へ借受候ニ付返
済方當時区长取約中或ハ租税課へ伺ノ上
返弁方取謀候筈ニ付云々等ノ記載有之ヲ
以テ直ニ戸長ヨリ返弁受度旨請求スト雖
モ事理曖昧トシテ結果セサレハ民法上未權理^マ
〔五B〕
ノ到ラサル者ニ付難及受理懇牒却下候事^{そちよう}
明治十年一月

〔五A〕〔五〕〔貸金〕訴狀却下案伺^(注6)

十年第四十三号*

* 欄外上部に墨で横書き

〔六A〕〔五十二〕〔原告代人陳述書〕^(注7)

明治十年一月八日目安審問ニ付原告

代人^(注8)

第一章

第一条

旧広島藩政ノ頃賀茂郡代官所へ
第一号証書ノ通調達致シ爾後
第二号証書之通り歎願致セシ処
租税課^{かけあい}ヨリノ下紙ニ基キ尚戸長
へ^{じんぜん}縣合第三号証書ヲ受取シニ荏苒
今日ニ到ルト雖更ニ返弁不致呉ニ付
右戸長ヨリ返弁受度候事

〔六B〕

II 春哲 印*

* 小判型朱印

ナス可ラサル者ニ付受理セス却下候事

印*

主 「松野」 **
副 「山田」 **

** 丸朱印
** 丸朱印

明治十年一月八日

可請取山代価違約之訴状

広島縣安藝国廣嶋六丁目下組

□□□□□番邸

商 MM 唐一

同縣同国廣嶋研屋町□□□番邸

NH 若助方ニ寄留

商 SM 萬二郎

第七十八号

〔七B〕

(記述なし)

〔七A〕 〔六〕 〔可請取山代価違約〕
印*

* 「横地安信」の丸朱印

本訴証書ニ基キ結約履行セサルニ於テハ素ヨリ違約ノ償金請求
セル旨申立ル上ハ事実損害ナキ違約料ニテ徒ニ要求

広島地方裁判所所蔵『却下文書』(明治十年)について (一)

〔八A〕 〔六一二〕 〔原告人の陳述書〕^(注9)

明治十年第七十八号*

* 本文書は、署名を除き全文朱書き

可請度山代価違約ノ訴御審問ヲ受

一一〇(一一〇)

△資 料▽

修道法学 三七卷 一号

一〇九(二〇九)

原告人左ニ申上候

第一条 該証書中違約料云々記載ノ

儀ハ事実損害ナキ違約ノ償金ニシテ

証表ノ通山代価悉皆払呉レ候ヘハ

請求セスト雖モ若シ結約履行

セサルニ於テハ則違約料ハ素ヨリ

要求仕候本旨ニ御座候事

右之通相違不申上候 已上

明治十年一月九日

〔八B〕

M M 唐一 印

S M 萬三郎 印

追加

第二条 該訴被告ニ於テ定約履行

セサル旨趣ハ当初売渡シタル代価ヨリ方今下

落セルニ付残金渡シ不呉若シ被告ニ於テ売

渡シノ地所伸縮境界ニ関シ申立ル趣ハ自

分共ニ於テ異議ナク該件ニ付入費等

悉皆弁償可仕儀相違無御座候事

M M 唐一 印

S M 万三郎 印

〔九A〕【七】〔証書実印押捺請求〕
印*

*「横地安信」の丸朱印
本文は朱書き

該件証書請取通帳ニ非スシテ店判ヲ用ユル者ニ付

明治六年第二百三十九号^(金10)ノ公布ニ依リ裁判上証

据ニ不相立訴状却下候事

印*

明治九年^マ一月十日

主 山田**

副 松野**

** 丸朱印
** 丸朱印

明治十年一月九日

証書実印押捺請求ノ訴状

廣島縣安藝國廣島榎町

六百廿九番次新拾五番邸

平民 原田 東三郎

第九十三号***

〔九B〕

(記述なし)

*** 朱書き

〔二〇A〕【八】〔二重取米代価取戻し〕

印* 「横地安信」の丸朱印

本訴第一第弐ノ証ハ被告人ニ於テ米代価二重ニ受取タル

トノ事実ヲ証スベキモノニアラズ故ニ受理セズ訴状

却下候事 一月十一日

印*

主 一色**

副 松野**

** 丸朱印

** 丸朱印

明治十年一月十日

二重取米代価取戻シノ訴状

廣島縣安藝國賀茂郡

阿賀村□□番邸

農 KS 助三郎

第百貳十貳号

〔二〇B〕

（記述なし）

〔二一A〕【九】〔貸金催促〕

印*

* 「横地安信」の丸朱印

広島地方裁判所所蔵『却下文書』（明治十年）について（一）

印紙貼用ナキ証書ヲ以テ訴出ルモノニ付受理及パス
訴状却下候事 一月九日

印*

主 「一色」**

副 「松野」**

明治十年一月八日

貸金催促之訴状

兵庫縣撰津國菟原郡***

大石村八十四番邸

商 OU 隆平

第六十六号

〔二一B〕

（記述なし）

〔二二A〕【一〇】〔貸金〕^{〔注12〕} 慫慂却下案

十年第百五十九号*

明治十年一月十五日

七等判事 印***

* 欄外上部に事件番号を墨横書き

一月十五日却下**

*** 「横地安信」の丸朱印

主 十二等出仕 川北 祐利 印

一〇八（二〇八）

ハ資料

副 四級判事補 一色 小十郎 印

惣牒却下案伺

該訴小室信夫部理代人ノ名義ヲ以テ出

訴及フト雖モ明治九年司法省申第壹号

布達ニ牴觸スルヲ以テ受理及ハス惣牒^{****}却^{****}

下候事

「惣」は「訴」に同じ

〔一二B〕

(記述なし)

〔一三A〕 〔一一・一二〕〔貸金〕^(注14) 訴答却下案伺

* 欄外右側に「二月十六日却下」

の墨書き

* 欄外上部に墨横書き

第三千六百七十五号六号^(注15) ****

明治十年一月十三日

七等判事 印 ****

* 「横地安信」の丸朱印

主 十三等出仕 松野 節夫 印
副 十二等出仕 川北 祐利 印

修道法学 三七卷 一号

一〇七(一〇七)

訴答却下案伺

原告人

本訴両証書ハY D耕造取次ニテ全人手ヨリ領

収シ金田亦該人ヘ付与セシ者ニシテ被告面前結約

ノ証書ニ無之旨申立ルニ付右耕造審問及フ処原

告ヨリ受取シ金額ハ被告方取次ノ手續ニ基キ亡

T N彦助等ヘ相渡シタレトモ全人ヨリ被告富藏^{*}ヘ伝^{*} 目次では

達セシ有無ハ弁知セサル旨陳述セリ而シテ被告ニ

於テハ一切 賄^{おぼえ} 無之旨弁駁スル耳ナラス該証不正ノ

〔一二B〕

「覚」に同じ

書面ナル由方今刑事ノ推問中ニ付〔所持セサル旨原

告申立ル上ハ被告ヘ対シ督促ノ憑拠ナク且既ニ刑法

ノ糺問ニ涉リシ者ナレハ〕^{*} 全方到底ノ処断ヲ受ケサル

* 内の三行は棒線で削除

以前民法上其書ノ權利得失ヲ論スヘキ筋無之〔順次ニ非ス〕^{****}

* 内は棒線で削除

仍テ該両証書共採用及ヒ難ク訴狀却下候事

但 訴訟入費ハ規則ノ通被告并引合人ヘ弁償ス

可シ

被告人

該件原告 惣^{うづたふ}ル両証書ハ不正ノ書面ナルヲ以テ方

今刑事ノ糺問中ニ付〔二係リ

原告所有セサル耳ナラス）***

□内は棒線で削除

全方処斷ヲ受サル以前ハ民法上其書ノ得

失ヲ論スヘク筋無之旨趣ニ因リ訴狀原告人ヘ

〔一四A〕

却下致シタルニ付答書擯斥候事

但 訴訟入費ハ成則ノ通原告人ヨリ弁償ヲ受クヘ
シ

〔一四B〕

（記述なし）

〔一五A〕【一一・一二一二】^(注16)【原告人の口供書】

明治十年一月十一日御審問ニ付

原告人口供

第一条

該件六十三円四拾錢ノ地所書入

証書ヲ以金円貸渡候事

第二条

右地所ノ儀ハ近隣ノ地ニ付兼而^{かねて}

広島地方裁判所所蔵『却下文書』（明治十年）について（一）

承知モ致居候間戸長ヘモ相届候

処相違無之趣ニ付貸渡候事

第三条

右貸附ノ儀ハ都テ取次人^す

〔一五B〕

Y D 耕造ナル者罷越シ申入当

正金相渡候節モ耕造ヘ

相渡候事

第四条

出訴前取次人Y D 耕造時々

催促致候処返戻無之ニ付

出訴候事

第五条

三千六百七拾五号訴ノ証拠及ヒ

三千六百七拾六号訴ノ証拠モ同様

Y D 耕造ヨリ受取候ニ付都テ

〔一六A〕

本人并証人ヘ掛合不致候事

第一号ハ戸長ノ公証有之第二

号ハ戸長與書無之候事

同日二一口ニ貸付印形等モ被

告本人実印ニ付S M 富

一〇六（一〇六）

藏*ヨリ返并可致義務
有之候事
* 目次では「富造」となっている

NJ 文之進印

追加

第六条 該件両証書ハ明治九年十二月廿三日

比ト相駭警察出張ヘ御呼出ニ付謀書印ナル不

〔一六B〕

正ノ書面ナル趣ヲ以御引上ニ相成仍テ持參不仕事

第七条 前条ノ次第二テ該証書正不

正ノ御処分ハ未タ不罷在付差置候事

第八条 前条両証書ハ既ニ刑事課ニ於テ御糺弾

中ニ有之候事

〔一七A〕【一一・一二一三】^(注17)【被告人の口供書】

明治十年一月十一日御審問ニ付

被告人口供

第一条

原告事申越ス第三千六百七拾五号

同三千六百七拾六号ノ訴狀ニ附ス証

文名下ノ押印ハ自分実印

相違無之候間自分他行中
妻ミトナル者TNハイ兩人ノ
所業ニ而留守中印形并
地券狀等ヲ持出シYD耕
造ヘ相頼ミ今般ノ原告ヨリ

〔一七B〕

金円借受候趣ナレトモ自分ハ一切
存シ不申事

第三条

右不埒之所業致妻ミト警
察ヘ自首仕當時御吟味中
ニ付同人等ヲ御糺明之上ハ判
然可仕自分ニ於テハ答書
テ申立候通ニ御座候事

SM 富藏印

〔一八A〕【一一・一二一四】^(注18)【引合（人）の陳述書】

明治九年第三千六百七拾五号同三千

六百七拾六号

貸金催促ノ訴答引合トシテ御審

問ヲ受左ニ申上候

第一条

該兩件ノ義ハ原由亡TN彦助傳ヒ被告金子入用ノ趣ヲ以借用方ノ依頼ヲ受原告ヨリ金兩口合〔七〕テ八拾円借受直ニ右彦助ヘ正ニ相渡し尤〔モ〕全人ノ言ニ応シ口錢トシテ式円四拾錢受取費用仕候事

第二条

原告訴狀記載ノ兩証書ハ前条ノ通亡彦

〔一八B〕

助ヨリ受取借主富藏ヘハ此後ニ付一切面談

仕タル事無之尤印届トシテ戸長役場ヘ該

証書持参候処素ヨリ全人ノ実印ニ相違ナキ

旨承リ謀書印等ノ儀ニハ決而無之儀ト安堵シ

取扱候事

第三条

前条取扱ノ金額ハ彦助ヘ渡シタル以後全

人ニ於テ借主富藏ヘ相渡シタル有無ハ彦助死

亡ノ今日ニ至リ何トモ実否取調難付候事

第四条

右彦助儀ハ目今居所分明ナラサルTNワイト申

者ノ夫ニ有之候事

〔一九A〕

第五条

前第三条ニ申立タル八拾円ノ内六拾円ハ彦助ヘ相渡し残ル式拾円モ全人ヘ可渡筈ナルヲ折節彦助死去ニ際シ全人妻ワイニ於テモ該件曾而承知ノ趣ニ付前々ヨリ手續ヲ以右ワイヘ相渡候ニ相違無御座候事
右之通相違不申上候 已上

明治十年一月十二日

YD 耕造 印

〔一九B〕

〔記述なし〕

〔二〇A〕〔一三〕【年賦金并に異約償金請求】

□*

*「横地安信」の花押か

該訴目安相糺ス処原告請求スル年賦金ノ外違約償金ハ到底事実損害ナキ償金ナルニ付裁判上無効ノモノトス

仍テ受理セス却下候事

一月十七日却下

△資料▽

修道法字 三七卷 一号

一〇三(一〇三)

主 「小島」 ** 丸朱印
副 「山田」 ** 丸朱印

明治十年一月十五日
年賦金并二異約償金請求之訴状

廣島縣安藝国沼田郡廣瀬村
六百二拾九番次新十五番邸

平民 原田 東三郎 ***

*** 目次欄には

「MK 和吉」

第貳百七号

〔二〇B〕

(記述なし)

〔二一A〕【一四】〔貸金取約違約〕却下案伺^(注19)

第貳百九号*

明治十年一月十七日 一月十七日却下

* 欄外上部に墨横書き

七等判事印** 「横地安信」の丸朱印

主 十三等出仕 松野 節夫 印
副 三級判事補 山田 熊雄 印

却下案伺

本訴ハ貸金取約違約ノ名義ニテ金円返

弁方請求ノ廉記載シアリ然ルニ証書中租
税課何ノ有無而已弁知致シ度旨趣要求
スルニ於テハ名実抵触スルニ付且該証書ノ原
因旧廣島藩債ナル旨申立ルト「雖」トモ判然其
筋ノ証憑書無之上ハ事由明瞭ナラサルニ付
受理難及訴状却下候事

〔二一B〕

(記述なし)

〔二二A〕【一四一二】〔原告代人の陳述書〕^(注20)

明治十年第貳百九号

貸金取約ノ違約ノ訴御目安^(注21)安^(注21)紀^(注21)ニ

付原告代人左ニ申上候

第一条 該訴証書中旧藩御代官所伝

云々記載ノ儀ハ旧廣島藩御代官所へ

立用シタル金円ニシテ全体藩債

ニ相立ヘク者ニ有之候処其儀是迄度

々租税課等へ上申スルトモ当時区長取約

メ中等ノ指令有之只々遷延スル而已

ニテ結局ニ至ラサルヨリ先般勸解願出

被告面对ノ上調整シタル証書則該

〔二三B〕

訴訟ノ書面ニ相違無之候事

右之通相違不申上候 已上

明治十年一月十六日

追加

第一条 (棒線で抹消)^(注22)

第二条 該訴請求ノ旨趣ハ被告ヘ対

シ返金督促スルニハ無之羽文ノ通租税
課ヘ伺ノ有無ヲ承知仕度儀ニ御座候事

II 春哲 印

〔二三A〕【一五】〔訴訟入費〕 訴狀却下案伺^(注23) *

第貳百三号 *

明治十年一月十七日

十七日却下

* 欄外上部に墨横書き

七等判事 □ **

** 「横地安信」の花押か。〔二〇A〕のと同じ。

主 十二等出仕 川北 祐利 印

副 四級判事補 一色 小十郎 印

訴狀却下案伺

該訴提供スル書面 I 日村人民ヨリ

T G 柳平 S S K 祖一ヘ対スル書面ニシ

テ副戸長河野桂之助ヘ対スル筋無之耳

広島地方裁判所所蔵『却下文書』(明治十年)について (一)

ナラ主的トスル〔其〕

*** 金額ニ到テハ無証拠ニ付旁以難

及受理訴狀却下候事

□ 内の文字は朱点で抹消

明治十年一月

〔二三B〕

(記述なし)

〔二四A〕【一六】〔家券証請求〕

印 *

建物書入質規則中書入質証券ヲ請

求スル期限ヲ過去リ訴出ツル者ニ付受理

セス却下候事

印 *

主 小島 **

** 丸朱印および附箋に朱書き

副 松野 **

** 丸朱印および附箋に朱書き

明治十年一月十八日

家券証請求ノ訴

1011 (1011)

△資料▽

修道法学 三七卷 一号

一〇一（一〇一）

廣島縣安藝国

安藝郡大須賀村

千百八拾三番邸

農 奥本 數奇男***

*** 目次欄には

第貳百八十号

「KZ 友之助」

〔二四B〕

（記述なし）

〔二六A〕【一七一二】^{（注26）}原告人の陳述書

〔二五A〕【一七】〔地券名前書換〕訴状却下案伺^{（注25）}

第貳百五十八号*

七等判事 印**

一月十九日却下***

主 十四等出仕 小島 範一郎 印
副 四級判事補 一色 小十郎 印

訴状却下案伺

該訴*目安及審札処証書中元金返済セハ

* 目次には「地券
名前書換請求」

地所差戻スヘクトノ約定有之ニ付名ハ売渡シ

ト雖モ實際貸借ナルヲ明証スヘク且該地ノ

貢祖諸役モ文政年中**ヨリ殆ト六十余年

間被告人ヨリ相納メ来リ加之明治五年地券証

モ被告人ニ於テ拝受セル上ハ倍々田地売切

ニ非ラスシテ實際貸借タルコト明白疑ナシ

** 西曆一八一八
三〇年

然ル上ハ地券名前切替ヲ要求スル權利
無之者ニ付受理セス却下候事

〔二五B〕

（記述なし）

地券証名前切替要求ノ訴御目安札ニ付
原告人左ニ申上候

第一章

第一条 今般訴上候証書題目ニ売預ケ
ト有之ハ田地ヲ売渡シ直々預リ小作
致ストノ旨趣ニ候事

第二条 年貢諸役ハ被告人ヨリ相納メ

居リ候尤加子地米式石ハ明治七年

迄受取り来リ候事

第三条 明治五年地券発行ノ節モ論

地々券証申受方村役場ヘ申出候処

〔二六B〕

村役人ニ於テ村方名寄帖ノ名前未タ被
告人名前ニ相成リ居ルニ付得渡^{とく}不申

段申答へ候間今日迄被告人へ掛
合ヲ遂ケ居り候事

第四条 論地ノ地券証ハ既ニ被告人申
受ケ居り候事

右之通相違不申上候 以上

明治十年一月十八日 Y N 又兵衛 印

安藝国廣島水主町
□□□□番次新□□番邸
商 T N 徳藏

第貳百八十七号
(二七B)
(記述なし)

〔二七A〕【一八】【貸金催促】

印*

印稅反則ニ付訴狀却下候事

明治十年一月二十日

*「横地安信」の丸朱印

印*

主 「山田」 **
副 「小島」 **
丸朱印

〔二八A〕【一九】【貸金催促】

印*

該件本人請人へ係リ一時ニ請求シ
且印稅反則ニ付訴狀却下
候事

印*

明治十年一月廿日

*「横地安信」の丸朱印

主 「山田」 **
副 「小島」 **
丸朱印

明治十年一月十九日
貸金催促之訴狀

明治十年一月十七日
貸金催促ノ訴狀

廣島縣

廣島縣備後國奴可郡

廣島地方裁判所所藏『却下文書』(明治十年)について(一)

1000(1000)

△資料▽

所尾村□□番邸 MO 榮次郎 同居

農 TN 有一郎

第貳百三十九号

(二八B)

(記述なし)

修道法字 三七卷 一号

九九(九九)

第三百貳号

(二九B)

(記述なし)

「HO 臺三郎」

【二九A】【二〇】年賦金渋滞請求

印*

該訴ハ金主数名ナルニ付独〔リ〕HO 臺三郎^{のみ}耳

*「横地安信」の丸朱印

原告タル理由

無之ニ付受理セス却下候事

印*

主 「小島」 **

** 丸朱印

副 「一色」 **

** 丸朱印

明治十年一月十九日

年賦金渋滞請求之訴状

廣島縣備後國惠蘇郡

川北村□□番邸

農 HK 廣三郎 ***

*** 目次欄には

【三〇A】【二一】山代価残金請求

印*

本訴売買セシ地所分割境界ノ紛争アツテ他ニ証憑無

之旨申立到底違約ノ事由分明ナラサル上ハ代金請

求ノ筋無之者ニ付受理セス却下候事

印*

一月廿三日却下

主 「松野」 **

** 丸朱印

副 「一色」 **

** 丸朱印

明治十年一月十九日

山代価残金請求之訴状

廣島縣安藝國廣島六丁目下組

□□□□番邸

商 MM 唐一 ***

*** 目次欄は

同縣同國廣島研屋町□□「MM 唐一」のみ

番邸 NH 善助方ニ寄留

商 SM 萬二郎

第貳百九十四号

〔三〇B〕

(記述なし)

明治十年一月廿二日

MM 唐一 印

SM 萬三郎 印

〔三二A〕〔三二二〕【原告人陳述書】^(注29)

明治十年第貳百九拾四号

山代価殘金請求ノ訴御審問ヲ受

原告人左ニ申上候

第壹条 該証書中西へ拾三間分

割云々記載アルハ只ニ拾三間丈ケ

売渡シタル旨趣ナレトモ其實際ニ於

テハ図面ノ通り十九号杭ヨリ下タ六号

杭へ見通シ右六号杭ヨリ西へ十三間ノ処

ヨリ東悉皆売渡タル結約ナルヲ被告

ニ於テハ今更其分割経界ニ付異

議申争到庭境界紛争ノ訴ナリ尤

境界ノ証拠ハ一切無之候事

〔三二B〕

右之通相違不申上候 已上

広島地方裁判所所蔵『却下文書』(明治十年)について(一)

〔三二A〕〔三二二〕【証書面日数字記入】

印*

該件HDソワHDソワ宛ノ両通証書ヲ以TM

スワ訴出ル処HDソワ并同スワハTMスワタルノ

事由無ケレハ受理難及訴狀却下候事

印*

明治十年一月廿三日

廿三日 却下**

主 「山田」 ***

** 二カ所に朱書き

副 「一色」 ***

*** 丸朱印

*** 丸朱印

明治十年一月廿二日

証書面日数字記入訴狀

広島縣安藝國廣島鉄砲屋町

五百八番邸 寄留

九八(九八)

ハ資料

京都府士族

関定

目次欄は「TM スワ」

第三百十六号

〔三二B〕

（記述なし）

修道法字 三七卷 一号

九七（九七）

番次新番邸

士族 N J 常太郎

第三百二十号

〔三三B〕

（記述なし）

〔三三A〕 〔三三〕 〔売掛代金催促〕

印

該訴

印税規則違反ニ付受理

不及候事

印

明治十年一月廿三日 一月廿三日 却下

主 「山田」

副 「一色」

二カ所に朱書き
丸朱印

明治十年一月廿二日

売掛代金催促ノ訴状

廣島縣安藝國沼田郡

竹屋村

〔三四A〕 〔二四〕 〔貸米催促〕

印

該訴印税規則違反ニ付受理

不及候事

印

明治十年一月廿三日 一月廿三日 却下

主 「山田」

副 「一色」

二カ所に朱書き
丸朱印

明治十年一月二十二日

貸米催促ノ訴状

廣島縣安藝國安藝郡

大須賀村千百八十三番邸

農 奥本 數奇男

「横地安信」の丸朱印

「横地安信」の丸朱印

第三百十五号

〔三四B〕

(記述なし)

〔三五A〕〔二五〕【地券書換請求】

印*

借用金証文ヲ以地券書換請求スヘキ
筋合無之ニ付該訴受理不及訴状
却下候事

印*

明治十年一月廿二日 一月廿三日 却下**

主 「山田」 ***

** 二カ所に朱書き

副 「松野」 ***

*** 丸朱印

*** 丸朱印

明治十年一月廿日

地券書換請求訴状

廣島縣備後國

御調郡三原町

千九番邸

農 赤松 常七 ***

*** 目次欄は「ED 判次郎」

広島地方裁判所所蔵『却下文書』(明治十年)について (一)

第三百六十号

〔三五B〕

(記述なし)

〔三六A〕〔二六〕【証書改換請求】

印*

該訴被告人(二)於テ自儘ノ証書差越シ事実相違
シタル旨ニテ証書改換ヲ請求スト雖「トモ」証書書改ムヘ
キトノ定約モ無ク
事実ノ相違ヲ了知スヘキ憑拠モ無之上ハ採上準
理難及訴状却下候事

印*

明治十年一月廿四日

主 「山田」 **

** 丸朱印

副 「松野」 **

** 丸朱印

明治十年一月二十三日

証書改換請求之訴状

廣島縣安藝國廣島銀山町

□□□□番邸

九六 (九六)

△資料▽

修道法学 三七卷 一号

九五（九五）

商 KN 正次郎***

*** 目次欄は

第三百四十三号

「KN 庄次郎」

〔三六B〕

（記述なし）

〔三八A〕〔二八〕【貸金催促】
印*

*「横地安信」の丸朱印

〔三七A〕【二七】【年賦金催促】
印*

*「横地安信」の丸朱印

本訴被告身代限揭示日限過去訴へ出ルヲ以テ受理セス
却下候事
(注32)

印*

主 「不明」**
副 「不明」**

** 丸朱印
** 丸朱印

貸金催促之訴状

明治十年一月廿四日

主 「一色」**
副 「松野」**

** 丸朱印
** 丸朱印

明治十年一月廿二日
年賦金催促之訴状

廣島縣安藝國廣島榎町
六百廿九番次新十五番邸
平民 原田 東三郎***

*** 目次欄は

第三百三十九号
〔三七B〕

「MK 和吉」

第三百七十八号
〔三八B〕

（記述なし）

廣島縣安藝國沼田郡楠木村
□番邸
商 TT 為次郎

〔三九A〕【二九】〔山代金取戻し〕

印*

*「横地安信」の丸朱印

本訴全年月日ノ両証ヲ掲ル上ハ一件二途ノ
結約ナルニ付何レヲ以テ

根拠トナス可キ者乎分明ナラス仍テ受理セス
却下候事

印*

主 「松野」 **

** 丸朱印

副 「山田」 **

** 丸朱印

明治十年一月廿四日

山代金取戻シ之訴状

廣島縣備後ノ国御調郡

三ノ庄村□□□□番邸

農 E Z 三兵衛

第三百八十七号

〔三九B〕

(記述なし)

〔四〇A〕【三〇】〔買受鐵請求〕

広島地方裁判所所蔵『却下文書』(明治十年)について(一)

印*

*「横地安信」の丸朱印

本訴買受ル鉄請求ハ売掛ケ代金ノ反对ニ

シテ其實全一ナリ然ラハ明治六年第三百

六十二号^(注33)ニ照シ既ニ出訴期限ヲ過去リタルヲ

以テ受理セス却下候事

印*

主 「松野」 **

** 丸朱印

フク「山田」 **

** 丸朱印

明治十年一月廿四日

買受鐵請求ノ訴状

廣島縣安藝国廣島四丁目

七百八拾壹番邸

商 金子 新七 ***

*** 目次欄は「NS 宇太郎」

第三百八十号

〔四〇B〕

(記述なし)

〔四一A〕【三一】〔貸金催促〕

印*

*「横地安信」の丸朱印

九四(九四)

△資 料▽

修道法字 三七卷 一号

九三（九三）

本訴請求ノ金額ハ他ニ負債主SD太郎治ノ証書所持セル旨申立ル上ハ其証ヲ

聞キ借主ニ非（サ）ルNS助右衛門外三名ヲ被告トスル筋無之ニ付受理セス却下候事

印*

主 「松野」 **

** 丸朱印

副 「山田」 **

** 丸朱印

明治十年一月廿四日

貸金催促ノ訴状

廣島縣備後国芦田郡

中須村□□□番邸

農 KT 郁太郎 ***

第三百八十八号

〔四一B〕

（記述なし）

人

目次欄は「TH 李兵衛」、
「KT 郁太郎」はその代

KT 郁太郎* 印

* 原告代人

〔四二B〕

右ノ通相違無申上候 已上
明治十年一月廿六日
第一条 本訴証書中本人云々記載ノ儀ハSD太郎次ノ借財ニテ該訴ノ外別ニ地所書入レノ公証書全人ヨリ受取所持仕候ヘトモ返済セサルニ付該诉被告人取扱ニテ取極書面ナルヲ以記載セシ者ニ付全ク受人ノ旨趣ト相心得候事

明治十年一月廿六日

貸金催促ノ訴御目安紀ニ付

原告代人左ニ申上候

第一条 本訴証書中本人云々記

載ノ儀ハSD太郎次ノ借財ニテ該訴ノ外

別ニ地所書入レノ公証書全人ヨリ受取所持

仕候ヘトモ返済セサルニ付該诉被告人

取扱ニテ取極書面ナルヲ以記載セシ者

ニ付全ク受人ノ旨趣ト相心得候事

右ノ通相違無申上候 已上

明治十年一月廿六日

〔四二B〕

KT 郁太郎* 印

* 原告代人

〔四三A〕〔三二〕【買付米請求】^(注35)

印*

* 「横地安信」の丸朱印

本诉被告身代限掲示日限過去訴出ル者ニ付

明治十年第三百八十八号

〔四二A〕〔三二〕【原告代人の陳述書】^(注34)

受理セス却下候事

印*

一月廿七日

主 「松野」 **

副 「山田」 **

** 丸朱印

** 丸朱印

明治九年十二月八日

買付米請求ノ訴状

廣島縣安藝國廣島

小町千八十三番邸

士族 吉井 護***

第三千五百八十六号

〔四三B〕

(記述なし)

『訴状受取録』には
代言人と表記して
いる

主 「一色」 **

** 丸朱印と張紙に朱書き
副 「松野」 **

** 丸朱印と張紙に朱書き

明治十年一月廿六日

貸金催促ノ訴状

廣島縣

安藝國廣島研屋町

三百五番邸

商 岡 謙藏***

*** 目次欄には「ST 常吉」

第四百十五号

〔四四B〕

(記述なし)

〔四五A〕〔三四〕【貸金催促】

印*

* 「横地安信」の丸朱印

〔四四A〕〔三三〕【貸金催促】

印*

* 「横地安信」の丸朱印

本訴ハ借主貳名ヲ置キ加印ノ者壹名ヲ相手取出訴スルモノ
ニ付受理セス訴状却下候事

印*

広島地方裁判所所蔵『却下文書』(明治十年)について(一)

本訴ハ借主三名ノ内KT八郎ヨリ貸金三分ノ一ヲ受取ルニ付
全人ヲ除キ残ル貳名ヲ相手取ルモ右貳名ニ於テ八郎ハ借主ノ限ニ
アラザルコト承諾ノ証モ之レナキ以上ハ八郎ヲ除クノ謂レナキモ
ノトス依テ受理セス
訴状却下候事

九二(九二)

△資料▽

修道法學 三七卷 一號

九一（九一）

印*

主 「一色」 **
副 「松野」 **

** 丸朱印
** 丸朱印

明治十年一月廿六日

貸金催促ノ訴狀

廣島縣安藝國廣島

寺町三百三番邸へ寄留

土族 岡野 林藏 ***

*** 目次欄は

第四百十六号

〔四五B〕

（記述なし）

〔HB 源三郎〕

〔四六A〕 〔三五〕 〔貸金違約〕

印*

* 「横地安信」の丸朱印

本訴証書ハ地所書入証ヲ返戻スヘキ主旨ナル乎分明ナラサル耳ナ
ラス其書入証ハ

原被告六名ノ連借ナル旨申立ル上ハ債主ヘ対シ共ニ返金ノ義務
アル者ナリ然ラハ原告ニ於テハ自己ノ返弁ヲ閣キ當ニ証書ヲ請求
スル

筋無之ニ付受理セス却下候事

印*

主 「松野」 **
副 「山田」 **

** 丸朱印
** 丸朱印

明治十年一月廿九日

貸金違約訴狀

廣島縣安藝國

山縣郡吉木村□□□□番邸

農 YM 増兵衛

第四百五十八号

〔四六B〕

（記述なし）

〔四八A〕 〔三六〕 〔貸米催促〕^(注36)

印*

* 「横地安信」の丸朱印

請求米額ノ内売掛代有リテ月賦ノ最後明治七年三月十五日
ノ翌日ヨリ起算スルモ已ニ其ノ出訴期限ナル壹年ヲ過去リタリ^(注37)
然レバ該訴ハ已ニ出訴ノ權利ヲ失ヒタル者ヲ混淆スルニ因リ
受理セズ訴狀

却下候也 印*

主 「粕屋」 **
副 「一色」 **
丸朱印 **
丸朱印 **

明治十年一月廿九日

貸米催促ノ訴状

廣島縣備後國
惠蘇郡川北村

□□□□番邸

農 K Y 卯平 ***

目次欄は「K D

清三郎」原告代人

第四百五十五号
〔四八B〕

(記述なし)

〔四七A〕【三六一二】^(注38)【原告代人陳述書】

明治十年第四百五十五号

K D 清三郎ヨリ A M 武左エ門へ掛ル貸米催促訴御

審問ヲ受ケ原告代人左ニ申上候

該証書面分ケ書ノ内第一項ハ明治六年三月貸付

第二項ハ明治六年十一月受取ルベキ者第三項ハ明治六

広島地方裁判所所蔵『却下文書』(明治十年)について (一)

年三月ニ山ヲ売渡シ其十月代米受取ルベキナリ
右三口合算シテ該証書ノ通り鉄ニテ月賦返償
ノ約ヲ結び候事
右之通相違不申上候 以上 「惠蘇郡」 **
明治十年一月三十一日 K Y 卯平 印 ** 三文字棒線で
抹消されている

〔四七B〕

(記述なし)

〔四九A〕【三七】【御裁決不履行】

印*

始審ノ裁判ヲ受ケタルニ(曲者ニ於テ) ** 已ニ ** 「横地安信」の丸朱印

控訴期限ヲ過去リタル後尚

曲者ニ於テ其裁判ヲ履行セザレバ其旨ヲ裁判

所ニ具状スルニ止リ再ビ訴出

ルノ限ニ非ズ

印*

主 「粕屋」 **
副 「山田」 **

丸朱印 **
丸朱印 **

九〇(九〇)

ハ資料 V

明治十年一月廿七日

御裁決不履行之訴状

廣島縣安藝國廣島

鉄砲屋町五百式番邸

商 二宮 豊三郎 *****

第四百三十四号

〔四九B〕

(記述なし)

目次欄は

〔ID 権之丞〕

修道法学 三七卷 一号

預ケ金淹滞之訴状

廣島縣安藝國廣島堺町

□□□□番邸

商 NY 亀助 *****

第四百八十五号

〔五〇B〕

(記述なし)

目次欄には

〔KG 要兵衛〕

八九 (八九)

〔五〇A〕 〔三八〕 〔預ケ金淹滞〕

印*

実印ニ非ザレバ民事裁判上証拠ニ不相立該訴証書面SG豊太郎
ハ実印ヲ押用シタリト雖トモTD豊一ハ見印ヲ押シIT傳八ハ
無

印ナリ因テ受理セズ訴状却下候也

印*

主 「粕屋」 *****

副 「松野」 *****

見留印の留を
略したもの

丸朱印

丸朱印

明治十年一月三十一日

〔五一A〕 〔三九〕 〔貸米淹滞〕

印*

該件証書ニ於テハ他ノ兩人ヨリ元利取立
年貢方ヘ可次戻トノ定約ニシテ該被告ニ
於テ原告ヘ対シ貸米淹滞ノ請求ヲ受ヘキ義
務ヲ負フ者ニ非ス仍

テ受理不及ノ訴状却下候事

印*

明治十年二月一日

主 「山田」 *****

副 「粕屋」 *****

〔横地安信〕の丸朱印

丸朱印

丸朱印

明治十年一月三十一日

貸米淹滞之訴状

廣島縣安藝國高田郡

上小原村□□□番邸

農 SM 久五郎***

第四百七十七号

〔五一B〕

（記述なし）

目次欄には

〔NY 亀助〕

廣島縣

安藝國賀茂郡寺家村

四百六十二番屋敷

農 三宅 武四郎***

目次欄は

第四百六十四号

〔五一B〕

（記述なし）

〔STD 八十七〕

〔五一A〕〔四〇〕〔貸金催促〕

印*

該訴印税犯則ニ付受理

^(注30)

不及候事

印*

明治十年二月一日

主 「山田」**

副 「粕屋」**

** 丸朱印

** 丸朱印

* 「横地安信」の丸朱印

三 注 の 部

一 凡 例

(一)

(1) 本稿は、『明治十年 却下文書』と題する簿冊の紹介を試みようとするものである。本簿冊は、現在、広島地方裁判所において保管されている。その表紙には、標題の他に「番號 民第二五號ノ一 裁判所名 廣島地方裁判所民事部 保存始期 明治十一年 保存終期 明治永久年」と書かれている。表紙の寸法は、縦二四・五cm、横一六・二cm、厚さ四・五cm。なお、末尾の写真を参照されたい。

貸金催促之訴状
廣島地方裁判所所蔵『却下文書』（明治十年）について（一）

八八（八八）

同裁判所には、もう一冊『自明治十二年至同十三年 却下文書』（民第三五號ノ二止）が保管されている。（表紙も「番號 民第二五號ノ二 裁判所名 廣島地方裁判所民事部 保存始期 明治十四年 保存終期 明治永久年」と書かれている）。

却下関係の簿冊で同裁判所に残されているのはこの二冊だけのようである。もっとも、後者は、標題は「却下文書」であるが、その「目次」に続く中表紙には「棄却文書編冊」と記されている（中には「訴答状却下」の文言も見えるので、当時は棄却と却下の用語は必ずしも確たるものではなかったと思われる）。

本簿冊に収載されている「訴状却下」の事件数は、目次の表によると、全部で二〇六件である。本簿冊は、かつて国立大学法学部の一時保管を経て国立公文書館へ再移管された判決原本のうち、時期が重なる広島地方裁判所の『明治十年（民事）判決原本』とは、内容上、重複する事件は無いようである。

（2）本簿冊に編綴されている「訴状」には、却下理由が朱書きされている（解題四にある明治八年司法省甲第十六号布達を参照されたい）。本簿冊には、訴状の他に、当事者である原告（人）・被告（人）の陳述書（口供書）など、当該事件と密接に関連する書類が訴状とともに、または訴状の代わりに編綴されているが、記録保存のために最小限度のものを除いて廃棄されたのだろうと推測している。

裁判所の裁判活動の中心部を示す記録として『判決原本』と『訴状受取録』乃至『事件簿』が考えられるが、本『却下文書』はそれらと相補関係にあると考えて、判決原本とは別に編綴して保管されてきたのであろうと推測している。従って、これら『却下文書』と銘打ったものが廃棄を免れていまに至るまで保管されてきたことは、明治前半期の裁判所制度の草創期に関する史資料のひとつとして、われわれには奇蹟のように思われるのである。

（3）本稿は、そのうち最初の事件から一月三日の日付のある訴状の部分四〇件を紹介する。本簿冊の四分の一程度にあたるもっとも本簿冊末尾の事件は、明治一〇年三月七日付けとなっており、最も番号の大きい事件（第二六一二号）は、六月一日付けになっているので、年間を通して編綴したのではないようである。また、本簿冊冒頭の二件は、訴状の日付が明治九年十二月二日と十二月二八日と記されている。裁判所での受付日と考えられる。それらの二件は、明治一〇年一月六日に裁判がなされたことになっている。いずれも『明治九年 訴状受取録』（民第六号ノ三）の中に該当する事件番号の記録と照合することができた。そこに、裁判の日付が記されていたからである。因みに、『明治九年 訴状受取録』（民第六号ノ三）には、最終の受付事件は「十二月二八日 第三千八百六号」とある。当時の訴訟事件の申立て数が多かったことが解る。

(4) 広島地方裁判所に保管されている『明治十年 訴状受取録』は「民第六号ノ五」及び「同六」の簿冊番号を附した二冊があり、『明治九年 訴状受取録』の続きと考えられる。しかし、冒頭の事件番号が「千百四十五号」なので、「民第六号ノ四」の簿冊があったこと、およびそれは既に失われてしまったようである。そのため、本簿冊の前半に収載されている若い番号の事件については、『訴状受取録』の記録と照合することができなかった。

(二)

(1) 本簿冊には、「訴状」のほか、当事者が「目安札」の審問に際して提出した「申立書」(口供、申口など)や担当裁判官により起案されたと思われる「訴状却下案(伺)」などが併せて編綴されている。それらはいずれも墨の手書きの文書で、袋綴じである。「事件番号」および訴状本体に書かれている「却下理由」、ときには「担当裁判官」や却下の「裁判日」が、朱書きされている。

(2) 本簿冊中の「訴状等」に記されている事件と『訴状受取録』の記載とを照合することができたもの(明治九年の事件番号)については、その記載事項も、注のなかに示すようにした。

(3) 本文中の旧漢字は、住所、氏名を除いて常用漢字で表記し、読みづらい漢字には適宜ひらがなでルビを振った。

広島地方裁判所所蔵『却下文書』(明治十年)について(一)

(4) 「申立書」などの用紙は、半葉一二行または一一行の黒または藍の罫紙で袋綴じ、中央下部に「広島縣」や「広島縣裁判所」と印刷されているものが使われている。

(5) 「訴状」は、白無地の半紙が用いられている。その訴状の余白に却下の理由が朱書きされている。なお、訴状の例は、末尾の写真を参照されたい。

(6) 裁判官、代言人、職業的な代人と思われる者など、公の職にある者については、その住所、氏名はそのままに表記した。原告(人)、被告(人)、およびそれらの代人、証人などの個人については、個人情報保護の趣旨に則り、その住所の一部について伏字□□□にし、人名については姓/氏の部分をアルファベットで表記した。判読困難な文字も□□で示し、脚注でその旨を記した。

(7) 「目次」には原告(人)と被告(人)の氏名が記載されているが、本簿冊には、訴状本体に被告(人)の氏名が記されていない。被告(人)の氏名を記載した用紙は編綴に際し除かれたと推測している。

(8) 用紙は袋綴じになっているが、広げれば右側の半葉には

八六(八六)

「丁数+A」を、左側の半葉には「丁数+B」を入れた。「B」葉が白紙の場合は(記述なし)と記入した。

(9) 用紙の末尾に空白の行があるときは、三行以下のときはその行数分を空け、三行以上のときは三行を空けた。

(10) 次の事件との間には三行を空け、前の丁の余白が三行以上のときは四行を空けた。

(11) 「訴状」または「訴状却下案(伺)」などで独立した事件の場合、冒頭の丁数の下に、「【事件番号】および【事件名】を強調カギ括弧で表記した。なお、事件番号は編集の便宜上、われわれが付けた、事件名は訴状等の表現に倣って書き出した。

その他の文書、例えば、「原(被)告(人)の申立書」などが訴状と併せて編綴されている場合は、事件番号に枝番号を付けた。

(12) 「訴状」の読下しの記載の順序について。定型的に表示するのが望ましいと考えるが、却下理由などは訴状の余白に記されているため、各項目が必ずしも順序立って並んでいない。そのため、一部を並べ替えて、以下の順序で記すことにした。

まず「却下理由(本文、日付がある場合はそれも併せて)」、「担当裁判官(主某、副某)」、「訴状提出(または受付)の年月日」、

「事件名(訴名)」、「原告(人)の住所氏名」、「事件番号」の順に記した。前二者および事件番号は、裁判所側で記入したもので、朱書きである。他の三者は、原告(人)側で記入したもので、黒の墨書きである。

なお、実際の訴状では、裁判の日付が訴状の日付より後であるが、表記にあたり、前者の方が前の位置にすることがある。また、「事件番号」は、訴状の末尾に朱書きされているが、本稿でも訴状の最後尾に置いた。なお、写真を参照されたい。

(13) 担当裁判官を示す「主 ○○○」「副 ○○○」の位置は、「却下理由」の後ろに統一した。ほとんど丸朱印であるが、朱の手書きや附箋に書かれたものもある。附箋や朱書きの場合、印鑑と二カ所にダブることになるが、一箇だけの表記とした。なお、「訴状却下案/伺」などの書類のみが編綴され、訴状本体が編綴されていないものについては、訴状本体は失われたようである。

(14) 訴状以外の書面、即ち当事者からの「申立書(口供書)」や「訴状却下案(伺)」などではできるだけ簿冊中の体裁に従った。本稿の一行の文字数が、印刷の一行の文字数を超えるときは、二行になった。

(15) 複合文字は、一字ずつに分けて記した(例、(雖) 卅は

「トモ」、「トキ」は「トキ」。その他、略記や略字は、例えば、「十」は等、略字の「」はコト、などと表記した。

(16) 『法令全書』は、国立国会図書館のデジタル図書と原書房による復刻版を併用した。

二 個別事件についての注

(注1) 明治五(一八七二)年「司法省達第十四号」(九月十九日)「訴訟入費償却仮規則」は、以下のように規定している(旧漢字は常用漢字に改めた。以下の法令についても同じ)。

「從來訴訟入費之儀ハ原告被告共自費或ハ居村町ノ費用ニ相成且証人引合之者等ハ他人争訟之為メ自己の職業ヲ廢シ貧窮之者ニ至リ候而ハ家族活計之道ニモ差響往々難渋致候者不少不都合之次第ニ付差向今般別紙規則之通相定候条同後右入費之儀ハ原被告ヲ論セス一切曲者之一身ニ引受償弁ス可キ事」とし、別紙で「訴訟入費償却仮規則」の表を定めている。それによると、例えば、「一 訴状其外事類認料 一枚十六桁十五字詰ニ付 十銭 一 証人並引合人手当 一日ニ付 五十銭 一 同旅費 一里ニ付 十銭 一 被告人直ナル者手当 一日ニ付 五十銭 但原告人直ナル時ハ此手当ナシ 等々」と定め、その末尾に「右掲載スル所ノ外臨時入費有之節ハ其分トモ総テ直者ノ難儀ニ不成様曲者ヨリ取立可申尤原告被告トモ曲直相半スル時ハ裁判所ニテ双方ニ割合之ヲ償ハシムヘク且双方示談行届タル節ハ各

広島地方裁判所所蔵『却下文書』(明治十年)について(一)

自ノ費用ヲ計算シテ銘々ヨリ償却セシムベシ」という規定を置いている。

因みに、白米(一〇kg)の値段は、明治元(一八六八)年五十五銭、同十(一八七七)年五十一銭。大工の手間賃(二人一日当り)は、明治元年五十銭、同十年四十五銭(何れも東京とある(週刊朝日編『値段の明治大正昭和風俗史』一一五、一二二頁(朝日新聞社、昭和五六年))。

(注2) 『明治九年 訴状受取録』(民第六号ノ三)には、原告は、KK七郎次外一人、「富田 次左衛門」(訴状では「治左エ門」)がその代人と記されている。

「十二月廿二日 訴訟入費請求訴

原 賀茂郡西野村 農

KK七郎次外一人

代人 富田 次左衛門

三千七百貳拾

十年一月六日

〇 却下

被 同郡新庄村水子惣代 農

掛一色 副松野

KS 只吾」とあり、

欄外上部に「決二五ノ一」の朱書きと朱の〇印が記されている。

(注3) 『明治九年 訴状受取録』(民第六号ノ三)には、以下のように記され、「明治十二(一八七九)年一月六日却下」とあるのは、本書の記載と符合している。

「十二月二十八日 貸金催促訴

原 摂津國堂町二丁目

IT 伊三郎

八四(八四)

〈資料〉

三千八百号 十二年一月六日

○却下 被 賀茂郡三ツ村

掛一色(副)小島 H K 兼藏」とあり、

欄外上部に「決二五ノ一」の朱書きがある。

(注4) 明治九(一八七六)年「太政官布告第九十九号」(七月六日 輪廓

附)は、以下のように規定している。

「金穀等借用証書ヲ其貸主ヨリ他人ニ譲渡ス時ハ其借主ニ証書ヲ書換ヘシムヘシ若シ之ヲ書換ヘシメサルニ於テハ貸主ノ譲渡証書有之トモ仍ホ譲渡ノ効ナキモノトス此旨布告候事

但相続人ヘ譲渡候ハ此限ニアラス」(『法令全書 明治九年』七三頁(国立国会図書館近代デジタル図書)。なお、明治九年は西暦一八七六年にあたる。

(注5) 『明治八年 訴状受取録』(民第六号ノ二)には、「家督出入ノ訴」についての裁許があつたことが分かる。因みに、明治八年は西暦一八七五年にあたる。

なお、当事者間の争いについては、広島地方裁判所保管の『自明治五年至同九年 裁判申渡案』に「二三」「家督相続妨碍訴」「二四」「家督相続妨碍控訴」の事件として掲載されている。同書の紹介について、加藤 高・紺谷浩司「明治初年、広島県庁の民事裁判について」(『自明治五年至同九年 裁判申渡案』(氓第二二六号)を中心として——『修道法学』第三四卷一号(二〇一一・九)一三七頁以下(二九五—二〇二頁) 参照。

修道法学 三七卷 一号

八三(八三)

(注6) 半葉二行藍罫紙、中央下部に「広島縣裁判所」の印刷がある。なお、「惣牒」という用語が使われている。「惣」は「訴」と同じ。

(注7) 半葉二行藍罫紙、中央下部に「広島縣裁判所」の印刷がある。

(注8) 明治六(一八七三)年「太政官布告第二百十五号」(六月十八日)

(布)は、

「人民一般商業及ヒ其他ノ事ニ因リ代人ヲ以テ契約取引等致シ候規則別紙ノ通被定候条此旨相達候事」として「代人規則」を定めた。

その第一条は、「凡ソ何人ニ限ラス己レノ名義ヲ以テ他人ヲシテ其事ヲ代理セシムルノ權アルヘシ 但シ本人幼年等ニテ其事理ヲ弁シ難キ時ハ其後見人及ヒ親族ノ者協議ノ上代人ヲ任スルヲ得ヘシ

第二条 凡ソ他人ノ委任ヲ受ケ其事件ヲ取扱フ者ハ代人ニシテ其事件ヲ委任スル者ハ 本人ナリ故ニ代人委任上ノ所行ハ本人ノ關係タル可シ

第三条 凡ソ代人ハ心術正実ニシテ二十一歳以上ノ者ヲ撰ムヘシ(明治九年第四十四号布告を以て、「満二十歳以上ノ者ヲ撰ムヘシ」と改正)

第四条 代人ハ総理代人部理代人ノ別アリ総理代人ハ其本人身上諸般ノ事務ヲ代理スル者ニシテ部理代人ハ特ニ其委任スル部内ノ事務ヲ代理スルヲ得ル者トス 云々」として、本人より実印を捺した委任状を交付すること、委任状には総理代人または部理代人であることを明示すべきことを定めている(『法令全書 明治六年』三〇〇頁)。「明治九年二月二日の代言人規則(司法省布達甲第一号)施行後も、

代言人の免許のない者がこの代人規則により当事者の代人として出廷することができ、同時に受任できる件数についての制限はなかった」とし、明治一三年五月一三日代言人規則の改正（司法省甲第一号布達）と同時に、司法省が代人について甲第二号布達を定めて規制しようとしたことが指摘されている。（瀧川 毅『明治初期民事訴訟の研究』続・日本裁判制度史論考』信山社二〇〇〇年一八二頁）。

〔注9〕 半葉二行黒罫紙、中央下部に「廣島縣」の印刷がある。本文書は、末尾の署名の他は総て朱書きである。

〔注10〕 明治六（一八七三）年「太政官布告第三三九号」（七月五日）（布は、

「人民相互ノ諸証書面ニ爪印或ハ花押等ヲ相用ヒ候者間々有之候処当明治六年十月一日以後ノ証書ニハ必ス実印ヲ用ユ可シ実印無之証書ハ裁判上証拠ニ不相立候条此旨可相心得事 但商法上ノ証書ニ実印ヲ用ヒ請取通帳等ニ店判ヲ用ヒ候ハ別段ノ事」と規定している（『法令全書 明治六年ノ一』三一九頁）。但し欄外上部に「十年第四十四号布告ヲ以テ廃止」の注記がある。

〔注11〕 明治七（一八七四）年「太政官布告第八十一号」（七月二十九日 輪郭附）は、以下のように規定し、別冊「証券印税規則」で詳細を定めている。

「明治六年二月第五十六号以下追々及布告候証券印紙規則総テ相廃シ更ニ別冊ノ通相定メ本年九月一日ヨリ施行候条此旨布告候事 但帳簿罰則ハ来ル明治八年一月一日ヨリ施行候儀ト可相心得事。そして、

広島地方裁判所所蔵『却下文書』（明治十年）について（一）

同規則第一則第二条において、「一 総テ規則ノ通 ○ 印紙 ○ 界紙ヲ用ヒサル者ハ後日如何体ノ故障差起出訴ニ及ヒ候共其書類ハ一切取揚ケ裁判不相成事」、また、第四則第十四条において、「前数条ニ掲クル処ノ犯人ヲ見届ケ訴出ル者アルトキハ事実取糺ノ上相違ナキニ於テハ其實トシテ其過料金ノ半高ヲ下サルヘキ事」として、「犯則」の語が見えている（『法令全書 明治七年』六八〜八四頁）。

〔注12〕 半葉二行藍罫紙、中央下部に「廣島縣裁判所」の印刷がある。こ

こでも「罫罫」の語が用いられている。

〔注13〕 明治九年「司法省布達甲第一号」（二月二十二日 輪郭附）は、いわゆる「代言人規則」である。前文は「今般代言人規則別紙ノ通相設ケ候条来ル四月一日ヨリ以後ハ右規則通り免許ヲ経サル者ヘ代言相頼候儀不相成候条此旨布達候事云々」と定め、

「第一条 凡ソ代言人タラントスル者ハ先ツ専ラ代言ヲ行ハント欲スル裁判所ヲ示シタル願書ヲ記シ所管地方官ノ検査ヲ乞フヘシ地方官之ヲ検査スルノ後状ヲ具シテ司法省ニ出ス然ル後其許スヘキ者ハ司法卿之レニ免許状ヲ下付ス」以下、全一五ケ条より成っている（『法令全書 明治九年』一三五頁以下）。

〔注14〕 用紙は、半葉二行藍罫紙、中央下部に「廣島縣裁判所」と印刷されている。なお、本文中の「民法」の意味不詳。

〔注15〕 二つの事件番号の事件が一緒に取り扱われている。
『訴状受取録 明治九年』（民第六号ノ三）には、第三千六百七拾五号事件の記事は、以下のとおりである。

八二（八二）

〈資料〉

修道法字 三七卷 一号

八一（八一）

〔十二月十九日

原 廣島水主町 農

三千六百七拾五

貸金催促訴

N J 文之進

十年一月十六日 却下

被 同所同町 農

掛 松野 副 川北

S M 富藏」とあり、

欄外上部に、「決二五ノ一」と〇印が朱書きされている。なお、事件番号と担当者名、却下の文字とその日付は朱書きである。

『訴状受取録 明治九年』（民第六号ノ三）には、三千六百七拾六号事件の記事は、以下のとおりである。

〔十二月十九日

原 廣島水主町 農

三千六百七拾六

貸金催促訴

N J 文之進

十年五月十五日

被 同所同町 農

掛 松野 副 川北

S M 富藏」とあり、

欄外上部に、「決二五ノ一身」の朱書きと朱の〇印がある。なお、事件番号と担当者名、〇印、却下の裁判の日付は朱書きである。

〔注16〕 用紙は、半葉二行黒罫紙、中央下部に「廣島縣」と印刷されている。

〔注17〕 用紙は、半葉一行黒罫紙、中央下部に「廣島縣」の印刷がある。

〔注18〕 用紙は、半葉二行藍罫紙、中央下部に「廣島縣裁判所」の印刷がある。

〔注19〕 用紙は、上部欄外に事件番号が記されている。「訴状」本体が何らかの事情で失われたことによるようである。

〔注20〕 用紙は、半葉一行黒罫紙、中央下部に「廣島縣」の印刷がある。

〔注21〕 「目安札」は、江戸時代に行われたもので、訴訟人が奉行所に提出した訴状案（目安）の修正、すなわち目安札を受け、訴えが審理に入るか否かを決定する手続き。目安札により訴状案を修正することにより目安が成立したという（石井良助『近世民事訴訟法史』三二頁。なお、寺社奉行所では、目安を訴状といったから、同所では訴状札ともいわれたという（同上）。

〔注22〕 第一条は、第一条の文字も棒線で抹消されている。棒線の墨が濃いため、特に二行目が判読困難であるが以下のように読める。

「第一条 該訴要求ノ金高ト返金

ノ 濟口高□□」

〔注23〕 用紙は、半葉二行藍罫紙、中央下部に「廣島縣裁判所」の印刷がある。なお、本件には、上部欄外に事件番号が記されている。訴状本体は失われたことによるようである。

〔注24〕 明治八（一八七五）年太政官布告第一四八号（九月三〇日）「建物書入質規則」（『法令全書 明治八年』一九〇頁）。

〔注25〕 用紙は、半葉二行藍罫紙、中央下部に「廣島縣裁判所」の印刷がある。訴状本体が失われたことによるようである。

〔注26〕 用紙は、半葉二行藍罫紙、中央下部に「廣島縣裁判所」の印刷がある。

〔注27〕 明治七（一八七四）年太政官布告第八一号（七月二九日）「証券印紙規則改定証券印税規則」（『法令全書 明治七年』六九頁以下）。

〔注28〕 〔注27〕を参照。

(注29) 用紙は、半葉二行黒罫紙、中央下部に「広島縣」の印刷がある。

(注30) (注27) を参照。

(注31) (注27) を参照。

(注32) 明治五(一八七二)年太政官布告第百八十八号(六月二十三日)

(布) は、以下のように規定している。

「貸金銀滯出入ニ付身代限申付候節以來ハ当人宅並各府県裁判所門前高札場等三ヶ所へ別紙案文ノ通相認メ三十日ノ間揭示致シ候上身代限済方可申付尤右之趣伝承日限中追願致候分ハ取札処置置可致事」として、三〇日間の揭示期間を定めたが、明治六(一八七三)年太政官布告第七十号(二月二十五日)(布)をもつて、「身代限申付候節各所へ揭示日数ノ儀三十日ト壬申第百八十八号布告ニ及候処詮議ノ次第有之六十日ト改正候条此段更ニ相違候事」と布告を出して、三〇日間を六〇日間に改めた(『法令全書 明治六年』六四頁)。

(注33) 明治六年太政官布告第三六二号(十一月五日)(布)は、いわゆる「出訴期限規則」で、第一条は六箇月限りの出訴期限の適用を受ける事項を列挙しており、本文の売掛金は第六号の「商人互の売掛金」を指していると考えられる(『法令全書 明治六年』五六七頁以下)。

(注34) 用紙は、半葉二行黒罫紙、中央下部に「広島縣」の印刷がある。

(注35) 『訴状受取録 明治九年』(民第六号ノ三)には、

「十二月八日

原 広島西町二丁目 士族

T D 高夫

三千五百八拾六 貸附米請求訴

代理人 吉井 護

掛 松野 副 山田 ○ 却 下

被 佐伯郡平良村 農

欄外上部に「決二五ノ一」の朱書きと朱の○印がある。なお、事件番号、担当者、裁判年月日および○印は朱書きである。

訴状では「買付米」となっているが、『訴状受取録』では「貸附米」となっている。

(注36) 本件は、「訴状」が「原告代人申立書」の後ろに綴じられているので順序を入れ替えた。従つて、ページの順序が入替わっている。なお、後者の用紙は、半葉二行黒罫紙、中央下部に「広島縣」の印刷がある。

(注37) いわゆる「出訴期限規則」第二条に、一年間の出訴期限の適用を受ける事項を列挙しており、本文の売掛金は「商人ヨリ商人ニ非サル者へノ売掛代金」に当たるとしている。なお(注33)を参照。

(注38) 用紙は、半葉二行黒罫紙、中央下部に「広島縣」の印刷がある。

(注39) (注27) を参照。本文中では、「犯則」の語を用いている。

四 目 次（一）～（四〇）

【附録】

『明治十年 却下文書』（民第二五号ノ一） 廣島地方裁判所民事部

目 次（その一）

番号	年度・番号	訴 名	訴状受理日	裁 判 日	担 当	目次欄の原告	目次欄の被告	備考（訴状記載上の原告等）
1	九年 三七二〇	訴訟入費請求	九年十二月 廿二日		主一色 副小島	KK 七郎次 外一名	KS 只吉	富田 治左エ門
2	三八〇〇	貸金催促	九年十二月 二八日		主一色 副小島	IT 伊三郎	HK 兼造	
3	十年 二一	貸金催促	十年一月 四日		主一色 副川北	富田 次左衛門*	IB 覺造	*富田 治左衛門の誤記か
4	五四	貸金催促	十年一月 六日		主一色 副松野	TD 九兵衛	MO 清次郎	山中 正雄
5	四三	貸金	十年一月 六日	一月十日	主川北 副一色	KB 茂八郎	TD 義一	十年一月八日 原告代人 I I 春哲陳述書 十年一月九日 訴状却下案伺
6	七八	可受取山代価違約	十年一月 八日		主松野 副山田	MM 唐一*	KN 儀三郎	*SM 萬三郎と連名 十年一月九日 原告陳述書
7	九三	証書実印押捺請求	十年一月 九日	一月十日	主山田 副松野	SGU 重助	YI 理一郎	原告 原田 東三郎
8	一二二	二重取米代価取戻	十年一月 十日	一月十一日	主一色 副松野	KS 助三郎	KG 要兵衛	

18	17	16	15	14	13	12	11	10	9
二八七	二五八	二八〇	二〇三	二〇九	十年 二〇七	九年 三六七六	九年 三六七五	一五九	六六
貸金催促	地券名前書換（切替）要求	家券証請求	訴訟入費	貸金（返弁方請求）	年賦金・違約償金請求	貸金催促	貸金	貸金	貸金催促
十年一月十九日					十年一月十五日			か 十年一月十五日	十年一月八日
一月二十日	一月十九日	一月十八日	一月十七日	一月十七日	一月十七日		一月十六日	一月十五日	一月九日
主 小山田 副 小島	主 小島 副 一色	主 小島 副 松野	主 小島 副 一色	主 小島 副 山田	主 小島 副 山田	主 小島 副 山田	主 小島 副 山田	主 小島 副 山田	主 小島 副 山田
T N 徳造 (藏)	K S 儀右衛門	K Z 為之助	T G 柳平 外一名	K B 茂八郎	M K 和吉	N J 文之進	N J 文之進	T G 尉太郎	M 三兵衛
N I 佐一郎	K T 元俊	N I 平八	K N 桂之助	T D 義一	K T 清左衛門	S M 富造 (藏)	S M 富造 (藏)	S I 熊次郎	K T 鮎次郎
	原告 Y N 又兵衛 十年一月十八日 原告陳述書 十年一月十九日 訴状却下案伺	原告 奥本 數奇男	十年一月十七日 訴状却下案伺	原告代人 I I 春哲 十年一月十六日 原告代人陳述書 十年一月十七日 却下案伺	原告 原田 東三郎	取引の取次（人） Y D 耕造	取引の取次人 Y D 耕造 十年一月十二日 被告口供 十年一月十二日 引合陳述 十年一月十三日 却下案伺	十年一月十五日 惣牒却下案伺	原告 商 O U 隆平

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19
三八一	三八七	三七八	三三九	三四三	三〇六	三一五	三二〇	三一六	二九四	三〇二	二三九
買受鉄請求	山代金取戻シ	貸金催促	年賦金催促	証書改換請求	地券書換請求	貸米催促	売掛代金催促	証書面日数記入	山代価値残金請求	年賦金滞滞請求	貸金催促
十年一月 廿四日	十年一月 廿四日	十年一月 廿四日	十年一月 廿二日	十年一月 二三日	十年一月 廿日	十年一月 二三日	十年一月 廿二日	十年一月 廿二日	十年一月 十九日	十年一月 十九日	十年一月 十七日
				一月二四日	一月廿三日	一月廿三日	一月廿三日	一月廿三日	一月廿三日		一月二十日
副主 山田	副主 山田	副主 松野	副主 不明	副主 山田	副主 山田	副主 山田	副主 山田	副主 山田	副主 松野	副主 小島	副主 山田
N S 宇太郎	E Z 三兵衛	T T 為次郎	M K 和吉	K N 庄次郎 (正)	E D 判次郎	O M 數奇男	N J 常太郎	T M スワ	M M 唐一*	H O 臺三郎	T N 有一郎
N T 信助	Y U 涌内	O N 次郎	K U 清左衛門	I M 才助	T S 大雄	O N 新八	I I 周平	O G 道助	K N 儀三郎	F T 市九郎	T D 清右衛門 外二名
原告 金子 新七			原告 原田 東三郎		原告 赤松 常七			原告 関 定	* S M 萬三郎と連名 十年一月二三日 原告陳述書	原告 細川 廣三郎	

40	39	38	37	36	35	34	33	32	31
四六四	四七七	四八五	四三四	十年 四五五	四五八	四一六	十年 四一五	九年 三五八六	三八八
貸金催促	貸米淹滞	預ケ金淹滞	御才判不履行*	貸米催促	貸金違約	貸金催促	貸金催促	買付米請求	貸金催促
十年一月 三十一日	十年一月 三十一日	十年一月 三十一日	十年一月 廿七日	十年一月 廿九日	十年一月 廿九日	十年一月 廿六日	十年一月 廿六日	九年十二月 八日	十年一月 廿四日
二月一日	二月一日							十年一月 廿七日	
主 山田 副 粕屋	主 山田 副 粕屋	主 粕屋 副 松野	主 粕屋 副 山田	主 粕屋 副 一色	主 松野 副 山田	主 一色 副 松野	主 一色 副 松野	主 松野 副 山田	主 松野 副 山田
S T D 八十七	N Y 亀助	K G 要兵衛	I D 権之丞	K D 清三郎 (Kに誤記か)	Y M 増兵衛	H B 源三郎	S T 常吉	代 言 人 吉 井 護	T H 李兵衛
M Y 利忠太	Y G 恒三郎 外一名	T D 豊一 外一名	O Z 万五郎	A M 武左衛門	O N 吾助 外二名	T G 健吾 外一名	K D 和助	M D 寛三郎	N S 助右衛門
原告 M Y 武四郎	原告 S M 久五郎	原告 N Y 亀助	原告 二宮 豊三郎 *訴状の標題は「御裁決不履行之訴状」	十年一月三十一日 原告代人 K Y 卯平より陳述書		原告 岡野 林藏	原告 岡 謙藏	原告 T D 高夫	原告代人 K T 郁太郎 十年一月廿六日 原告代人より陳述書

【注】

本簿冊に編綴されている目次欄を写したものである。原告と被告双方の

氏名が記載されている。しかし本体として編綴されている訴状には原告の住所氏名等しか記載されていない。

〈資料〉

- 1) 本簿冊に編綴されている訴状には、原告側の住所氏名、出身等だけが記されており、被告側の住所氏名、出身等は記載されておらず、残ってもない。いっぽう、目次欄には、原告および被告の氏名が記載されている。
- 2) 目次欄の氏名の者が当事者本人と推測される。訴状に記載されている氏名が目次欄に記載されている氏名と一致する場合は、当事者本人と考え、異なるときは、訴状に記載されている氏名が代言人または代人と考え、備考欄にその氏名を記した。

- 3) 代言人は公的な職であるので、その氏名を記した。いっぽう、代人は陳述書を提出している場合、その記載から判明した代人某として示した。

代人は当事者本人と同様に扱い、プライバシー保護の趣旨から、氏をアルファベットで置き換えた。業としていると考えられる代人については、代言人と同様に扱うことにした(例、富田治左エ門)。

- 4) 被告の氏名は、前述のとおり、本簿冊に編綴されている訴状からは分からない。プライバシー尊重の趣旨から、氏をアルファベットで置き換えた。

- 5) 氏名の記載に誤記と思われる箇所は、訴状に記載されている氏名を○で記した(例、徳造(藏))。訴状の記載の方が正確であろうと判断したことによるものである。

- 6) 目次の訴名欄に「全」と書かれているものは、それぞれの訴名(例えば、貸金)に改めた。

- 7) 数字の表記法が一貫していないのは、できるだけ訴状に記載されている表記に倣おうとしたことによるものである。

修道法学 三七巻 一号

七五(七五)

追記

本稿は、科学研究費(基盤研究(C))「日本近代法のゆらぎ―土地・家族・村の実証的研究―」(平成二五年度―二七年度)による研究成果の一部である。

お世話になった方々に対し、深甚の謝意を表する次第である。

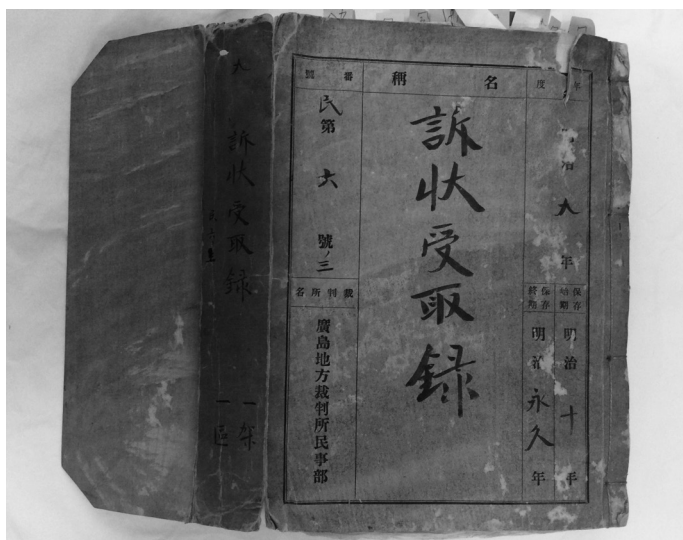
〈執筆者紹介〉

矢野 達雄(広島修道大学法学部 教授)

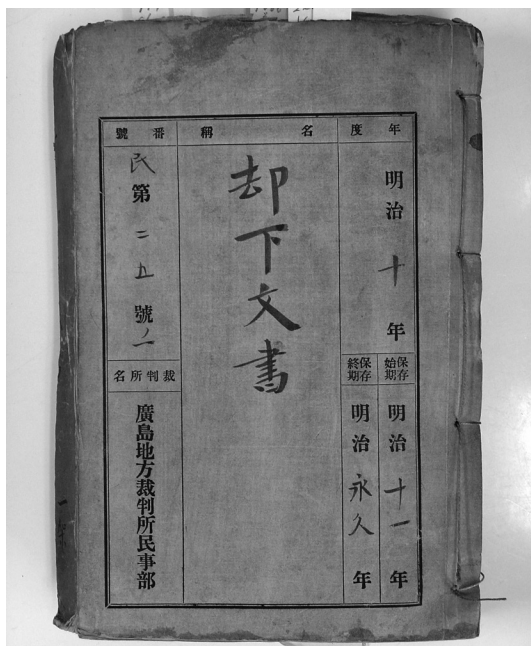
加藤 高(広島修道大学 名誉教授)

紺谷 浩司(広島大学 名誉教授)

五 写真（四葉）



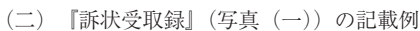
（一）『訴状受取録』表紙

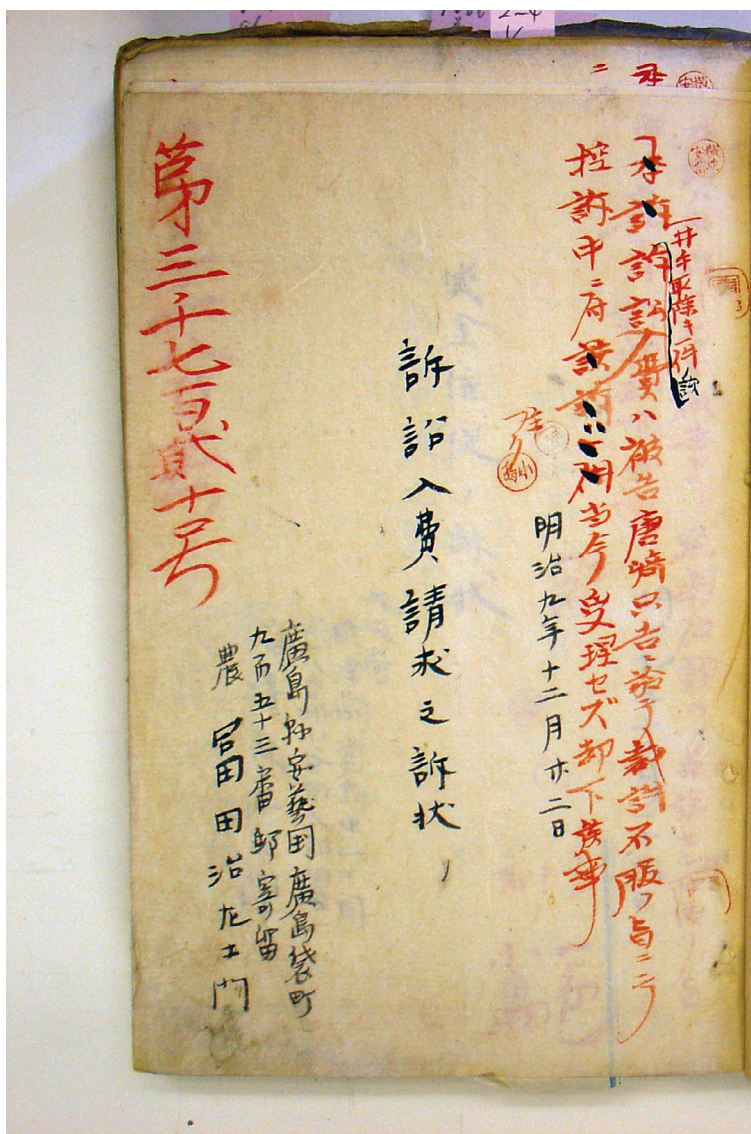


（三）『却下文書』表紙

広島地方裁判所所蔵『却下文書』（明治十年）について（二）

七四（七四）





(四) 『却下文書』(写真(三))の記載例